

平成29年度アクティブラーニング推進状況について

— 研究発表を中心に —

鶴岡工業高等専門学校アクティブラーニング推進ワーキンググループ

(Received on Jan. 31, 2018)

キーワード：アクティブラーニング，自学自習，教養教育

1. はじめに

本稿は、平成28年度鶴岡工業高等専門学校アクティブラーニング推進ワーキンググループ（以下、ALWGと略す。）の活動内容報告である。

前年度に引き続きグループ長は学校長指名により加田が務めたが、他のメンバーは加田がご協力を仰いだ有志メンバーをお願いすることになった。

これは、本校のアクティブラーニングの推進を等閑視した措置ではなく、より「やる気」のあるメンバーを中心に、今後のアクティブラーニングのありようを模索するための措置であったと考える。

本年度のALWGの活動内容は、外部への本校の活動内容の発信と外部からの情報の受信が中心内容となった。外部との交流は前年度より、さらに活発になったことは事実である。

本年度は日本高専学会年会講演会において、本ALWGメンバーにより2件の口頭発表を行い、また2件の研究集会に参加し情報を収集している。

その際、教務主事のご理解により、上記研究集会のうち1件は、特別に予算を組んでいただき、メンバーが出張している。この一事からも、本校がアクティブラーニング推進に力を入れていると言えるかと思う。また現時点では、3月にも研究集会1件に参加し、情報を収集する予定である。

2. 本年度の活動概要

アクティブラーニングを積極的に学校教育に取り入れることは、小学校・中学校・高校・高専・大学を問わず、社会より強く要求されている。本校にお

いても、平成27年度にアクティブラーニング推進ワーキンググループが発足し、アクティブラーニングの重要性を教員間に啓蒙してきた。本年度は昨年度に引き続き加田がALWGグループ長に就き、前年度を継承し、前段で述べた通り、本校のアクティブラーニングの外部への発信と、外部からの情報の受信に力を入れて活動を行った。

昨年度、活動を遂行する上で、「アクティブラーニング」に対するチーム員間の理解を共有するために、以下のように定義した。

「アクティブラーニングとは、学生が主体的に学ぶ行為全般を言う。教科学習のみならず、課外活動、ボランティア活動等の学生生活全般における主体的な学びの行為を指す。」

本年度も上記の定義の下に、下記の通りの活動を行った。

<企業との連携授業の実施について>

【実施の意義】

本校の学生は15歳から22歳まで長期間、工学について学んでいる。やがて工業社会へ出て行く学生達のため、日々の学びのモチベーション（学びを推進するエンジン）を高めるため、本校では企業で働かれている方を講師にお招きして、特別講義を積極的に企画・実施している。長期間の学業を、生き活きと継続するためには、学生達が参入していく工業社会で働く方の「生の声」を届けることが第一であると考えているからである。

【今までの実施実績】

企業との連携授業の実施も、今年で3年目を迎えた。企画・実施者は、教務主事・副教務主事・本ALWGである。

本年度は、協立化学産業株式会社様、ウシオ電機株式会社様、武蔵エンジニアリング株式会社様のご理解とご協力により、9月下旬、本科2・3・4年生全員を対象に行った。また、11月には専攻科1年生へも実施された。学生達にとって、日常の授業と異なり、企業の方が講師をしてくださるこの企画は、大変に刺激的である。

初年度は本科4年生と専攻科1年生が対象であったが、好評であったため、次年度には本科2年生も対象へ加え、本年度はさらに本科3年生も加えることになり、年々充実してきている。

本年度の講義内容は、2年生が接着剤を使用した効率的な実験の立案・実施・まとめ、3年生が山形県の観光プランの作成、4年生が中小企業と大企業の違いと「B to B (Business to Business)」についてと、ユニークかつ多彩な内容となった。今年も学生達には大好評であった。

【実施の成果】

本校の学生達にとって工学を学ぶことのモチベーションが強化されることはもちろん、講師陣の「伝えたい」という思いと授業への工夫を、しっかりと受け止める学生も多く見受けられた。普段は本校の学齢にある若者を対象にお話される機会の少ない講師の方々、あの手この手と努力されている姿に、社会人として必要な「人間力」を感じているようであった。このことは、この連携授業を実施した大きな成果だと考えている。

<日本高専学会への研究発表>

前年度の活動内容報告に、筆者らは下記のように書いた。

学校は生き物だ。その場その場に応じたリアルタイムの改善を行うことも重要であるし、また要求もされる。泥縄式であることは否めないが、「まず、準備の整った者が率先して実施していく」ことは変動期の社会においては必要なことであり、それは高専の教育現場においても同じことである。学校全体として、アクティブラーニングの取り組みの経験を重ねて、鶴岡高専独自のありようを模索していくしかない、本ALWGは考えている。

本年度の「リアルタイムの改善」を発信することの意味は、「鶴岡高専独自のありようを模索していく」ための一里塚を公開し、自らのありようを見直す契機を作ることにあつた。日本高専学会年会講演

会での2件の口頭発表は、そのために行ったものである。

特に今回の研究発表の特色は、アクティブラーニングを考える際に、大学教員経験者、高等学校教員経験者、本校技術職員、基盤教育(旧一般科目)教員それぞれの視点から、考察を試みた点。また「教養教育」と「アクティブラーニング」の理想的な融合について考えをめぐらした点。以上の2点である。

以下、予稿に加筆修正を加え、発表の概要を示す。

①「今後の高専教育にアクティブラーニングが必要な理由」

発表者：加田謙一郎*・一条洋和**・佐藤嘉***・中山敏男****

(創造工学科基盤教育グループ*・技術職員**・非常勤講師***・創造工学科情報コース****)

1. はじめに

本校のH28アクティブラーニング推進ワーキンググループでは、「アクティブラーニングとは、学生が主体的に学ぶ行為全般を言う。教科学習のみならず、課外活動、ボランティア活動等の学生生活全般における主体的な学びの行為を指す。」と定義した。その上で、教員が授業に様々な教育手法を取り入れることだけではなく、教員と学生の双方が対象と真摯に向き合い、各人の生活の中の勉強という確かな経験を持つことであると活動の指針を示した。学生が主体的に学ぶことを動機付けることこそが、本校のアクティブラーニング推進活動の主眼である。以上は本質的な推進理由であるが、近年の学生や高専の運営上の変化からも、アクティブラーニングは一層の推進を余儀なくされると考える。本稿はその理由を、大学教員経験者(中山)、高等学校教員経験者(佐藤)、本校技術職員(一条)、本校基盤教育教員(加田)の視点から、考察するものである。

2. 学修単位導入の問題

中山は、学生時代に高専から大学へ編入してきた学生から「講義は高専の先生の方が上手かった。大学の先生は講義が下手だ。」、また高専教員の友人から「大学教員は講義が下手である。」と耳にした。高専赴任以来、「上手い講義」、「受講者である学生が理解しやすい講義」とは何か。の解を探し続けてきた。見えた解は「高専では講義を、十分に時間をかけて

行い、講義中に演習をしっかり行う。」であった。以下、実際に中山の「材料力学」および「水力学」の講義を例に説明する。

【材料力学】

講義範囲：①応力とひずみ、②引張と圧縮（不静定を含む）、③丸棒のねじり（不静定を含む）、④せん断力と曲げモーメント、⑤はりの曲げとたわみ（不静定を含む）

期間：高専では通年（1年）、大学では半期（6ヶ月）

内容：講義の進め方であるが、高専では一つの単元を「理論→例題→演習」で進める。大学では理論のみの講義であった。講義内容の奥深さ（どこまで教えるか）に関しては、大学の方が深いレベルまで講義を行っていた。

しかしながら、高専教育には大学にはない利点がある。大学と比較した場合、浅いレベルであるが、演習まで行うことで、単元（学問）の意図するイメージが掴みやすいことである。

理論を学んだだけでは、理論を使えるようにはならない。まず理論を学び、（十分に安全なところで）それを何度もマネして使ってみる。この反復練習により、過程についての理解が進むことで、学生の自信につながり、最終的には理論を理解できるようになると考える。

単元（学問）の意図するイメージを掴むことで、もう一歩先の問題に出くわしたときに、今までの知識をフルに活用して考えることができるようになる。以上が、中山の実感である。

【水力学】

講義範囲：①概念、②流体の静力学、③連続の式、④ベルヌーイの定理、⑤運動量理論、⑥管路内の流れと損失

期間：高専、大学ともに半期（6ヶ月）

内容：高専、大学ともに理論を主体に行っている。講義内容の深さは変わらない。大学側の利点は数学・物理の知識量の差による内容理解の深さである。本年度からこの教科は学修単位となり、講義期間が通年より半期になった。その弊害として、例題・演習に割ける時間がなくなり、理論を中心とした講義になった。

水力学を担当するようになり、中山が、強く感じることは演習量の不足である。講義で理論を説明しただけでは専門知識は学生に定着しない。何度も反復練習をする必要がある。理論を理解し使えるようになると、学ぶ者はそれを嬉しく思う。その体験がさらなる好奇心を生み、工学への興味を強いものにする。この体験の繰り返しこそ、「主体的な学び・深

い学び」へ繋がるはずである。また、「主体的な学び・深い学び」を引き出すためには、教員が「この理論は工学のここに繋がる」とか「他の学問のここに繋がる」といった縦と横への繋がりを明示することも必要不可欠である。点在している知識が繋がることによる楽しさが知的好奇心を生み、学生が自ら考えを広げ深める。このような学生と教員が協働して形成する講義のありようは、文科科学省が示す「主体的・対話的で深い学びの実現」へ繋がると考える。以上より、学修単位を導入して、演習時間を設定できなくなった教科も増加している現在の高専において、学生自身の「主体的な学び」は、教授内容を定着させるために絶対に必要である。その動機付けこそ、教員が最も留意しなくてはならない事項であると考え。本来、「理論→例題→演習」の反復練習を主体とした講義を行うのが最良である。反復練習には時間がかかる。しかし、手間を惜しんでは次世代の人材育成は成り立たないのである。

3. 授業時間減の問題

一条は、実習時間数の変化を近年の大きな問題だと感じている。

平成 27 年度創造工学科がスタートし、1 年時の専門科目実験の時間が激減した。従来の電気系 1 年生の実習は、後期に 90 分×15 週であった。しかし、1 学科制に変更されたことにより、各専門分野の実習をすべて経験するスタイルになったため、電気系の実習は 90 分×6 週のみで、他の 4 つの分野の実習も 6 週ずつ行うようになった。

また、従来は後期に実習を行っていたこともあり、ある程度の専門分野の知識があることを前提で実習を進めることができたが、新学科では前期から実習が行われるため、専門知識が全くない状態で実習を進めなくてはならない。

加えて、2 年生以降でも時間割上の実習時間は減少している。

以上のカリキュラム上の事情から、短時間で効率の良い専門実験ができるように、本校の技術職員たちは工夫に努めている。

一例として、時間短縮のために導電ペンを導入したことが挙げられる。電気系の実習で時間を費やす作業の 1 つが回路結線である。通常の導線を用いる回路結線では、回路部品が大型であること、導線の長さが決まっていることなどから、部品同士のつながりが分かりにくく時間がかかってしまう。導電ペンの活用により、回路結線が直感的にできるように

なり、回路部品も小型になるため、時間をかけず効率的に実習を進めることが可能である。

また、学生が学ぶべき専門分野の範囲はますます広がっている。それに対して授業時間数は減少の方向で進んでいる。実習においてもこれまでより応用力がつくような内容に変えていく必要がある。近年では、パソコンと連動して多くの測定機器の機能を使えるような実習プラットフォームを活用し、短時間で効率の良い実習を行えるよう工夫している。

一条は近年、「考えることを容易にあきらめる学生」が増えていると痛感している。

例として、電気系 3 年生の実習における「レポート整理日」を挙げる。当初この日は、レポートの質を向上させるため、教職員が添削したレポートを修正する十分な時間を与えることを目的としていた。最初の数十分で誤字脱字やグラフの体裁など書式の部分を修正し、その後考察の充実のために追加課題に取り組んでもらうというのが、おおよその流れであった。

しかし近年、最初の添削時に指摘された点について 1~2 行程程度増やす、または問題あると言われた部分をごっそり削除する、など考える必要のない間に合わせの修正をしてそのまま解散時間になるまで時間をつぶす、といった態度が広く見られるようになった。

教職員が様々な工夫を凝らしても、学生が主体的に学ぶ姿勢でなくては、実習の効果を挙げることは困難だと感じている。学習者の「気付き」が何よりも大切である。「前に勉強したことは、こう繋がるんだ」という気付きを体験して欲しい。このように、一条も中山と同様に考えている。

4. 高等学校との比較

山形県立の工業高校と私立高校で機械技術科・建築システム科・自動車システム学科・総合情報学科で教鞭をとっていた佐藤は、高専の生徒はある程度の説明をすれば自分達で工夫をし、実習を進められるレベルにあることに驚いている。高専の学生は、考察も行える。すなわち、実習への「姿勢そのもの」が根本的に違うように思えると実感している。

実習内容自体については、高専と工業高校とは、ほとんど大差がない。

県立高校との比較した場合、実習の内容（質・量）についてはあまり大差がない。

むしろ、県立高校の場合が高い質・レベルに感じられる内容もある。建築・土木科で使用する「教科

書」などがそうである。これらの教科書は、大学 4 年生レベルでも大いに通用するし、3 年間通して指定教科書の 3 分の 1 も授業が進まなかった、ということもざらにあるのも現実だ。それだけ使用している教科書は内容が濃く、分厚いのである。

しかし、教科書に書かれている理論的な記述についての理解力は、県立高校生よりも高専の学生の方が高いと感じられる。

工業系高校生が 1 年次より習う文科省指定の「教科書」は、形から入るものがほとんどで、現象論として理解できないまま内容を詰め込まれるイメージが強い。

例えば、「工業数理基礎」という授業などは、その内容から導かれる教科の意図するイメージ・考え方は、歯に絹を着せずに言うならば、大学の初等教育並である。普通高校出身の佐藤にとって、「なんてレベルの高いことをやっているのか」と思えた。しかし、現実の工業高校で実施されている授業内容は、現象の『理解』に重きを置いたものではなく、訓練や課題の連続の連続であった。

例えば、「関数電卓の『使い方』」を学ぶのであって、関数式の意味、中身を学ぶのではない。つまり、より実務的な意味合いが強い。

工業科では「勉強」そのものがその科目に必要な「名称」を覚えることから始まる。つまり丸暗記である。筋道立てて考える、ロジック的に物事を捉えるということは、ほとんどできない状況なのではないか、と佐藤は感じている。

現実問題として、工業高校の生徒は「現場」で働くことが想定されているためか、モノの名前を覚えようと、実習でも現場でも困るため、「覚える」ことを優先しなくてはならないのである。生徒はそこに疑問を持つことはないのは、当然である。

工業高校の生徒達を取り巻く状況に比べれば、高専の学生達は恵まれた状況にあると言えよう。高専の実習は、「考える」という過程をきちんと踏んでいるし、それは大変な強みであると、佐藤は強く感じている。

5. まとめ

以上、高専の学生の気質の変化、学修単位導入や授業時間数減などの運営上の変化に伴う問題の克服には、「学生が主体的に学ぶこと」と、私たち高専教職員が「学生が主体的に学ぶことを動機付けること」が、より強く求められよう。今後の高専教育にアクティブラーニングが必要なゆえんである。

② 「教養教育の終着点を考える」

発表者：加田謙一郎

1. はじめに

本年度の高専学会年会講演会は「高専の教養教育―リベラルアーツが高専を面白くする」がテーマです。わたくしも一般科目の教員として、また高専の教養教育のありようを考え続けてきた者の一人として、この機会に、「教養」「教育」に関する素朴な疑問を提起できればと考えております。

さて、では一体、教養教育の「何」についての疑問を提起するのか？ わたくしは、「教養」「教育」の終着点について考えてみたいと思います。

終着点と申しますと大仰ですが、「目的」とお考え下さればよいと思います。すなわち、教職員にとって、「教養」を「教育」することの最終目的は何か、という疑問をテーマにしてみたいのです。端的に申しますと、「何」を押さえれば「教養教育」が成立すると考えることができるのか、ということです。

2. 「教養」「教育」の終着点はどこですか？

教養教育を論ずる際、その教育内容や教育手法にこだわると、「八幡の藪知らず」を彷徨うことになることは、以前に行っておりました高専教員や高専卒業生との勉強会で思い知りました。

教科それぞれの性質上、その教科の「何」を教授することが教養を教育することになるのか？ そのための教育手法はどのようなものが適切なのか？ 等々。教科によって、また同一教科であっても教員が異なれば千差万別、議論は白熱しましたが、話し合いは迷走に終わったことも事実でした。そこで、上記のようなテーマを、思いついた次第です。

極々一般的に申しますと、「技術」「教育」の彼方に、学生は「技術」のありようを見ることでしょう。「数学」「教育」の彼方に、学生は「数学」のありようを見ることでしょう。それは、良き教職員によってなされた場合、大変に美しい「知識」の形をとって顕現するものと思われまふ。

簡明に言い換えますと、学生にとって新しい「知識」が見えるようになる、ということが一般的な今日の教育の終着点である、と言えるかと思ひます。

では、良質な「教養」「教育」において、学生は「教養」「教育」の彼方に「何」を見ることになるのでし

ようか？

言い換えれば、わたくしたち教職員は、学生に「何」を見せることができたなら、「教養」「教育」を実施したと言えるのか、ということが問題の核心になると考えます。

3. 「教養」「教育」が見せるものを仮定する

前段の問いに対する、わたくしの現在の結論を申しますと、それは「人の顔」です。

のっぺらぼうの「知識」ではなく、営々と積み上げられてきた人類の文化、その努力をしてきた先人やわたくしたち自身の「顔」が見えることです。単なる「知識」として伝授することではなく、人間の営みとして積み上げられてきた「先人（これは大変に面映いことですが、学生の前に立っている以上、当然、わたくしたちも含みます）の経験としての知識」として伝授することです。

このようなことがもし、上手にできれば、学生たちは、「先人の残した知識」だけではなく、「先人の顔」を見ることになるのではないかと愚考いたします。

それは、未来を生きようとしている学生個々人が、「先人」と「顔」と「顔」をつき合わせる、対話の場となることでしょう。これは、どうしても功利効率を考えなくてはならない、所謂「教科教育」の発想だけでは成し得ないことであります。

4. 学びを推進するエンジン

平成 27 年 8 月 26 日付け「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」1)の p 16 の②学習活動の示し方や「アクティブ・ラーニング」の意義等に拠れば、「身に付けた個別の知識や技能も、そうした学習経験の中で活用することにより定着し、既存の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付いていき、ひいては生涯にわたり活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至ること」を、文部科学省は各教育機関に対して期待しています。

また、「こうした学びを推進するエンジンとなるのは、子供の学びに向かう力であり、これを引き出すためには、実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起する必要がある。」と付言しています。

アクティブラーニング（「手段」と考えます）と教養教育（「目的」と考えます）。近年の高専において

も話題になっているこの2つの大きな課題は、「学びを推進するエンジン」というキーワードによって結び付きます。

この「エンジン」は「実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起する」ものであり、狭義の教科教育の範疇を越えた教育内容を要求しているからです。わたくしは、この「エンジン」となる教育こそ、「教養」「教育」ではないかと考えています。

5. 明治4年の教養教育

明治4年(1871年)、旧幕臣であった中村正直は、サミュエル・スマイルズの『セルフヘルプ(自助論)』を翻訳、刊行しました。有名な『西国立志編』2)です。当時、福沢諭吉の『学問ノススメ』と並ぶ、100万部を売り上げたベストセラーです。欧米の300余名の成功談の集成で、当時の青少年の自主独立の精神を鼓舞した名著と言えます。

青少年の立身出世欲をいたずらに煽ったという批判もありますが、公平に見れば、その主張はあまりに一方的であると思います。その証拠として、明治36年3月「中学世界」に掲載された「非凡なる凡人」3)という、国木田独歩の小説を挙げることができると思います。

この小説の主人公・桂正作は当年24歳、「横浜の或る会社の技手」であり、「非凡人ではない。けれども凡人でもない」人物です。彼は、小学校の梅田先生より『西国立志編』を借り、熟読玩味して、自ら助くる者」となりました。小学校を出て後は、書中で得た300余名の先人の教えを実行し、貧しい身の上ながらも独立独行、着実に立身していく姿が描かれています。桂正作自身の言葉として、「若し僕が西国立志編を読まなかったら如何であつたらう。僕の今日あるのは全く此書のお陰だ。」と記されています。桂正作にとって、300余名の先人の記録は、彼の行動(アクティブラーニングによるもの、と行ってよいと思います。)の「エンジン」であり、300余名の見ぬ世の友との対話の場であったと考えます。桂正作には、先人一人一人の「顔」がはっきりと見えていたことでしょう。

6. 平成29年の教養教育

さて、わたくしたち高専の教職員が、教養教育で目指すべき終着点、おぼろげながらも見えてきた

ように思います。それは、のっぺらぼうの知識の伝授を注意深く避け、教職員各自の最大の努力で、その知識の先にある先人の「顔」と、未来を生きようとしている学生自身の「顔」が見えるように、生き活きと教育することだと考えます。それは、わたくしたちに、「学びを推進」させる「エンジン」を持つことを要求しているように思えてなりません。

明治3年ごろ、幕臣であった西周が、「百学連環」を私塾において講義しました。弟子の永見裕が、その講義録を作成しました。この講義は、当時の西洋の学問全体を、相互の関連性をもって捉えようとする講義でした。

中村正直にも同様の趣旨の「西学一斑」があります。(「明六雑誌」掲載)

「人の顔」は「学びを推進するエンジン」です。それによって推進される学び(学問)が、「既存の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付いていき、ひいては生涯にわたり活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至る」べきものであることは、「百学連環」や「西学一斑」以来、今日においても不変であると考えます。

参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ, 2017年7月7日現在.
- 2) サミュエル・スマイルズ著, 中村正直訳:『西国立志編』, 講談社文庫, 1991.
- 3) 国木田独歩:『明治文学の森 国木田独歩』, pp. 194-209, 筑摩書房, 2001.
- 4) 山本貴光,『「百学連環」を読む』, 三省堂, 2016.

以上、2件の学会発表は、本ALWGの活動の要であった。次段では、上記の内容を補完するために、今後の「学生の主体的な学び」を保証する提案を示す。

3. 学習支援研究の推進案

学生の主体的な学びを保証し、学業で躓いている学生に対する学習支援を行うことは重要な課題である。

近年は本校においても、基礎学力が不足している入学者が増加傾向にあるので、低学年時における学習支援が必要不可欠である。この課題に対応するためには、学生へ「主体的な学び」のありようを示し、学業における躓きの原因を指摘し、学業を軌道に戻す学習支援を行う「学習支援室」を立ち上げること

が必要であると、本ALWGは考えている。

その際、本校の教育の実態に合う支援形態を検討し、学生と教職員双方にとって、より効率の良い方法を模索する教育研究は不可欠である。以下、「学習支援室」立ち上げのための研究案を示し、本校内外の議論の活性化を願う。

本ALWGの立案した学習支援に関する教育研究は、高専本本科生（主として低学年生）を対象に、「学生自身が学習する動機や学習方法を見直す契機を与える」学習支援室を立ち上げることを目的とする。

この学習支援室は、従来の各教科の補講を行う支援形態を中心としない。

上級生有志と教員有志によって来室者へ、「学習への動機付け」、「授業の受け方」、「ノートのとり方」など、自学自習のための基礎（勉強の仕方）を再確認させて、各教科における躓きを克服するためのアドバイス（躓きの原因の指摘、その克服のための練習問題提供、成績の推移の確認など）を行うことを基本的支援内容とする。

究極の目的は、本校学生同士の「対話」による「自学・自習」の確立であるとする。

具体的には、本研究実施期間中は、特に数学・英語・物理を主とした支援を行い、その効果を検証することが要求される。

上記の研究は、本校や他高専における学習支援のありようを、青少年の実態に即して考えていくべき研究であり、青少年の教育に携わる期間すべてに応用可能な支援形態のモデル化を目指すべきでもあろう。以下、本研究案の目標・教育効果を図示する。

平成28年10月7日、保護者授業参観が行われた。その際、佐藤貴哉教務主事より、保護者向けの資料の一環として、「鶴岡高専のアクティブラーニング」についての資料作成の指示があった。「鶴岡高専独自のALアイデア」として教務主事が承認し、保護者へ示されたものの中に、次の一節がある。

- ・主体的な「学び」を推進することで、学生による「知的ネットワーク」を形成することを目標にしています。
- ・低学年のうちに、アクティブラーニングを多く取り入れることで、高専での5年間の学習をより実りあるものにします。
- ・アクティブラーニングが、教員と学生にとって、各人の生活の中で、確かな経験として残るような中身を持つことを目指します。
- ・アクティブラーニングを周知するために、必要に応じて、「主体的に学ぶこと」の意義と方法を伝授する「学習支援」を行います。

本年度は上記の最終項目である「学習支援」の具体化は実現できなかった。しかし、そのための教育研究の準備は立案できた。

保護者に上記の内容を示した以上、その実現に向けて、本校の教職員は努力を重ねる責任があると考えます。

4. 終わりに

FD活動に終わりはない。これは自明の事柄であるが、その終点なるものを仮定するとするなら、それはどのような状態を考えたらよいのであろうか。本ALWGは一つの解答案を持っている。それは、「主体的に学び、生き生きとした知的好奇心を持ち、生活のあらゆる場面ではつらつとした学生たちが集う学校」、といったビジョンある。このような学校が実現すれば、FD活動は自ずと終局を迎えることであろう。見果てぬ夢、である。しかし、わたくしたち教員は、そのような学校を夢見ながら歩かねばならない。来年度は、本年度より少しでも向上させたいと考える。

上記の一文は、昨年度のALWG活動報告に書いたものである。そして、本年度のALWGのメンバーも、この点では全くぶれることなく、地道に活

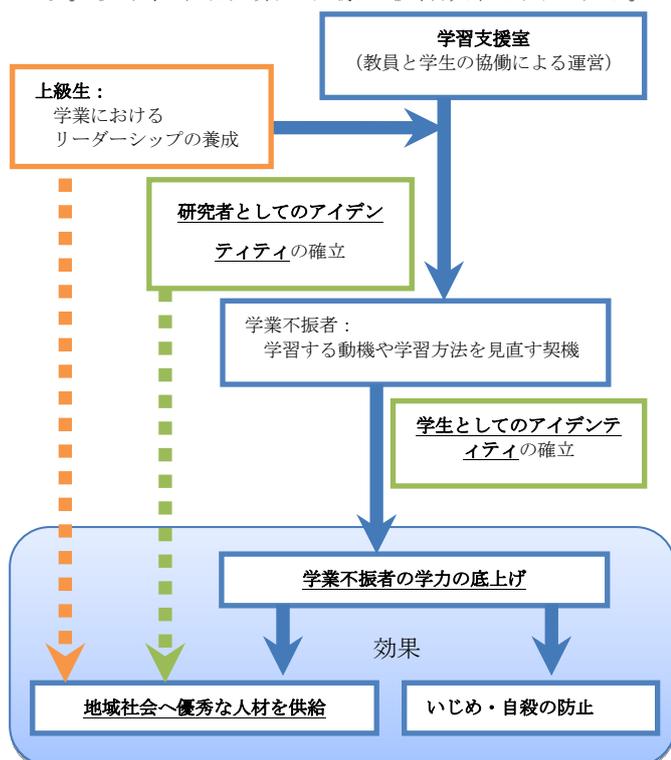


図1 本申請の目標・教育効果

動を行ったと言える。他高専の動向を掴む努力をし、なおかつ独自性を失わないように考えを進めること。このバランスをとることが難しい活動は、来年度のALWGに引き継がれるものと信じて、筆を擱く。

本年度アクティブラーニング推進ワーキンググループの有志構成員は下記の通りである。

加田謙一郎（グループ長）、一条洋和、佐藤嘉、中山敏男

なお、本稿は加田が起草し、ALWGのメール審議で承認された報告文書である。